

感想戦のお話

2021/12/06



今朝詠んだ新作です — 「人間は孤独ではない、なぜならば、家を出るときカギかけて出る」(笑い)

いま、世間で話題なのは、ゴルフの渋野日向子さんと将棋の藤井聡太君の活躍ぶりです。本選で苦戦していた日向子は、なんと、プレーオフでイーグルをとって逆転優勝しました。聡太は、一昨日はまたまた勝って、勝率8割以上をキープしました。驚くべき天才たちです。若い二人の快挙は、うれしいです。聡太君が、みんなから愛されて人気があるのは、ただ、将棋に強いだけでなく、人柄もよく、発言も、挙動も、若者らしく、威張らないで、あくまでも謙虚だからです。これまでの将棋の棋士にはない、清潔で、清純で、人を裏切らない、正直者の感じがするからです。対局中のお昼ご飯で、勝負飯に1000円を越えるランチを頼んだら、直ぐにネットのSNSで、「高校生のくせに1000円を越える食事を頼むとは」というお叱りの投稿がありました。それ以降、対局者が3500円の鰻重を頼んでも、自分は850円の天丼を頼むことにしています。高校生が対局しているのではなく、プロ棋士として対局しているのですから、文句を言われる筋合いはありません。「マスク警察」が横行したように、将棋にまで「ランチ警官」が現れるようになりました。

これまでの将棋の棋士と言えば、升田幸三さんのようなひげもじゃで、むさ苦しくて、威張った感じの人が多かったのですが、升田さんなんかは相手が長考していると、「おい、早く打たんか!」と恫喝までしていました。昔から、将棋の棋士は、生命を賭けた勝負師でした。実は、聡太君の指す手も、

裏をかいた勝負手ばかりで、相手を翻弄しては勝っています。毒マンジュは用意するわ、わざと王手飛車は指させるわ、解説者に「この手は友だちをなくす手ですね」と言わせるほどの策士であり、勝負師であり、寝業師です。それでなければ、8割の勝率を稼げるわけではありません。盤の前に座った聡太君は、決して、清純で、人が良い、好人物ではないのです。でも、実際の本人は、すこぶる好青年です。このギャップはどこにあるのでしょうか？

それは、聡太君は将棋士ではあるのですが、「勝負師ではなく、ゲーム師」なのです。将棋というゲームを楽しんでいるのです。大きな将棋の勝負が終わったあとでは、必ず、対戦相手も交えて、将棋仲間「感想戦」が開かれます。反省会です。そこでは、和気藹々と、いま指したばかりの盤面について、あれこれ、自由に意見の交換をおこなうのです。失敗を指摘することもあれば、名手を誉めることもあって、いま終わったばかりの棋譜を、再び、ゲームとして楽しむのです。プロ棋士が中心ですが、勝ち負けの勝負を離れて、仲間同士が一緒になって、ゲームを二度楽しむのです。毎回、感想戦が開かれるのは、将棋がゲームである由縁です。「感想戦」と「戦」の字が使われているのも、こちらの方が本当の「戦い」、すなわち、優れた技術をもった仲の良い仲間同士で終わったばかりのゲームについて、そこに独創性があるか、敗着がないかなど、将棋の質を高めるための論戦を戦わせるからです。棋士仲間の間では、「勝ち負けの勝負」はあとからついてくるのです。ゲームとしての楽しみと品位が先です。

「棋士は無くてもいい商売だ。だからプロはファンにとって面白い将棋を指す義務がある」といったのは、かの升田幸三さんです。一流のプロの将棋士は、勝ち負けではなくて、品位と感動を求めるのは聡太君のころざしと同じです。一茶の句に、「とが(罪)もない 艸(くさ)つみ切るや 負角力(まけずもう)」と「脇向いて 不二(富士)を見る也 勝角力(かちずもう)」という二つの句があります。

勝ちの多い聡太君は、いつも、晴れ晴れとして、仲間と嬉しそうに話合っています。照れて、富士山を仰ぎ見ながらも、だれより、一番、ゲームを楽しんでいるのでしょうか。さて、《影のない女》です。私は先に、「このオペラは第1次世界大戦の寓話である」と申しました。このオペラでは、人類の歴史において、もっとも悲惨で、残酷で、人間の悪が前面に出た出来事があつかわれています。勝った方も、負けた方も、不幸です。戦争には、勝ち負けはありません。どちらも、多大な戦禍をこうむったのです。ゲームの喜びはないものの、《影のない女》は、その「感想戦」です。では、木曜日に。

都築正道

カットは、聡太君が午後のおやつに注文したひよこ型スイーツ「ぴよりんアイス」。 都築正道